

(平成16年1月7日発行)

会報

第10号

北海道高等学校世界史研究会
事務局 北海道当別高等学校

☎061-0296

石狩郡当別町字春日町84-4

☎(01332) 3-2444 / FAX(01332)3-2380

フランス革命の理念と現代

北海道高等学校世界史研究会
会 長 櫛 井 征 四 郎
(北海道旭川東高等学校長)

気が付くと、定年退職の日が近づいてきました。高校生の時初めて世界史を習い、大学で西洋史を専攻して高校の教員になりましたが、この40年余を振り返ってみると、ずっと世界史にかかわり続けることができ、大変幸せだったと思います。

ところで、最近改めてフランス革命の「自由・平等・博愛」の理念について考えてみました。フランス革命は絶対王政の打倒に成功したものの、3つのスローガンの中では自由に重点が置かれ、平等が後回しにされたため、私有財産の廃止を唱えたバブーフらの過激な運動が起こったことはご存じのとおりです。

19世紀の欧米世界では資本主義が確立したわけですが、経済活動の自由は実現したものの、貧困と社会的弱者の発生、貧富の差の拡大といった問題は解決されず、マルクスなどを代表とする社会主義思想や運動を生み出しました。

20世紀になってロシア革命が起こり、初めての社会主義国家が出現しましたが、今度は平等（悪平等）に走り過ぎて自由が抑圧され、諸矛盾の顕在化によって、1989年のベルリンの壁の崩壊や91年のソ連邦の解体に至り、一つの時代が終わりました。

20世紀はある意味でバックス・アメリカナの時代であり、アメリカ合衆国が世界をリードしました。しかし、21世紀に入り、9・11の同時多発テロを境として、従来にも増してアメリカの独りよがりが目立ちます。かつて植民地として支配され、自国の自由と独立のために戦ったその国が、今や「自由のため」と称しながら、国連を中心とする国際社会の合意に背を向け、世界の憲兵としてあちこちに手を出しています。自国のことは棚に上げ、他国の核兵器保有を批判し、独裁政権は倒すべしとしてアフガニスタンやイラクに侵攻し、他ならぬ大量殺戮兵器を使っているのは、アメリカ自身です。

自由と平等は両立せず、博愛の精神は永遠に実現不可能なのでしょうか？ 私はアメリカの文化や人間は好きですが、国家としての最近のアメリカのふるまいには疑問を持たざるを得ません。

21世紀もまた、「自由・平等・博愛」が課題であり続けると思います。

第34回研究大会記録

日 時	平成15年8月7日(水)
会 場	札幌市生涯学習センター ちえりあ 研修室5・6
講 演	鶴島 博和 氏 (熊本大学教育学部教授)
研究発表	千田 周二 氏 (北海道興部高等学校)
司 会	遠藤 忍 氏 (北海道札幌東高等学校)
	室田 恵二 氏 (北海道風連高等学校)
記 録	石川 竹博 氏 (北海道旭川北高等学校)
	飯田 恵利子 氏 (北海道札幌平岸高等学校)

講 演

「オスカー・ハレツキー『ヨーロッパ史の時間と空間』を読む」

熊本大学教育学部教授

鶴 島 博 和 氏

はじめに

近代歴史学は、19世紀のヨーロッパにおいて国民国家が誕生する過程で誕生した。近代歴史学とは大学に講座を持ち、何らかの形で国家によって公認され、支持され、もしくは干渉された知の体系のことである。そこで最も重要な課題は時間と空間における国家の正当性の立証と、国民のアイデンティティの確立である。従って国民国家こそ歴史の重要な対象となる。そのため歴史教育の最も重要な点は、われとかれのアイデンティティを探すきっかけを生徒に与えることではないだろうか。日本人であるという意識の生成は、いろいろな過去の殺戮なのである。その上で自らの日本人というアイデンティティを作り上げていかなくてはならない。現代という時点でさまざまな日本人がいる。こうした前提に立つと、「われ」の相対性という点から世界史という科目の重要性が見えてくるであろう。しかしながら国民国家が、歴史研究の単位としては不十分であることを見抜いたのはトインビーであった。また日本の世界史の教

科書が一国史の寄せ集めのモザイクと言ったのは、同じイギリスの歴史家であるG・バラクローである。私たちが世界史の中でどの単位に属しているか、この問いかけは極めて限定された射程しか持たない国民国家の呪縛を解いて、私たちのアイデンティティを求める旅程なのである。

では、私たちは世界史の叙述の単位を何に求めたらいいのだろうか。言い古された言葉ではあるが「文明」に求めたいと思う。ただ2点注意しなくてはならない。1つは「文明」の定義。ここでは「暦と度量衡に象徴される身体的価値観を共有する広域社会」としたい。「社会」とは秩序化された人間集団というほどの意味である。文明構造を考えると、中核・周辺・辺境という三地帯区分はウォーラーステインを持ち出すまでもなくわかりやすいものである。この場合、中核とは価値を生産し供出する場を意味する。具体的には宮廷と首都である。この帝国の価値を受け入れる地帯が周辺である。帝国というのは税の強制徴収装置であると同時に、富の分電盤でもある。皇帝の支配状態を徳治という。ローマ帝国ではこれをローマの平和という。皇帝の支配を拒否した場合には戦争になり、負ければ帝国の一部に戻り、勝てば独立できる。どうだろう、ローマの平和に関する教科書の説明は正しいだろうか。辺境は帝国の外側にありながら、帝国の徳や平和を受け入れた国や地域をいう。しかし、辺境といっても中心支配の受け入れ方によって立場も違ってくる。1つは新羅や東ゴート王国のように帝国に従属した国。2つ目は中世アイルランドや日本のように片足を帝国に突っ込みながら最後は独自の道を進むもの。両者の違いは隔海度の差であろう。2つ目の注意点はどのような文明も、単独では存在しないということである。7世紀以降、ユーラシア大陸ではどのような文明圏も相互的な関係なしには存続し得ない。そして現在の地球の大半に影響を与えている文明が誕生したのがだいたいこの頃なのである。

I 今日の話の目的

オスカー・ハレツキーは亡命ポーランド人である。彼の共産主義と絶対主義に対する憎しみにも似た評価は原体験によるものである。このあたりの意識が、『ヨーロッパ史の時間と空間』という最終章における、自由主義とキリスト教に対する極めてオプティミスティックな態度に表れている。ただ今日の話は決してこの本の解説ではない。彼の物差しを借りてヨーロッパ史を相対化することが今日の目的である。それどころかで高等学校の世界史の授業構成を意識しながら、文明圏としてのヨーロッパの形成と変質の過程を覗いてみるのが目的である。

ヨーロッパとは何か。キリスト教文明圏である。ハレツキーは正教全体を考えている。この場合正教と言うのは、ギリシア哲学によって基礎を与えられ、ローマ帝国の宗教となり、初期の公会議でその基本的な枠組みを作り上げていったキリスト教のこ

とを指す。ニケーア公会議でアリウスを排し、三位一体のアタナシウスを正統教義とした教会である。ハレツキーにとって東西教会に分かれていく過程こそが、ヨーロッパの形成過程なのであって、初めからヨーロッパが存在している訳ではない。キリスト教世界が分かれ、西がラテン的キリスト教世界となっていく中で、ヨーロッパの原基が出来上がっていくわけである。

II ローマ帝国と地中海世界

では一体、ヨーロッパ文明の始まりをどこに設定したらよいのであろうか。前提はローマ教会とキリスト教である。しかしその前に、ユーラシアの比較的乾燥した地帯がギリシア文明の洗礼を受けたことを忘れてはいけない。東の方が西の方よりも発展していたし、経済的にも生産力は高かったことを念頭におかなくてはならない。ローマ帝国は地中海を内海とする巨大帝国だが、3世紀には帝国の重心は東の方へ移り始めていた。330年のコンスタンティノープル建設はこのことを見事に語っている。476年には西ローマ帝国がオドアケルによって滅ぼされ、これが西ローマ帝国の滅亡とされてきた。私はローマ帝国滅亡論の根底にあるのは近代的な国家論だと思う。近代以前の国家的なるものには、固有の領土も固有の国民も存在しない。あるのは権力の中心と、それを受け入れる個人ないし団体が存在するだけである。4世紀末の状況は2人の皇帝がそれぞれ徴税権を獲得したことを意味したのであって、2つの帝国が誕生したことを意味しない。2人の勅令はどちらも有効だったのである。ちょうど双頭の鷲をイメージしてもらいたい。

こうした前提から当時の状況を振り返ってみたい。当時の帝国西部の諸王たちは、皇帝から称号や官職をもらうことで、ローマ帝国文明圏すなわちキリスト教文明圏での地位を獲得しようとしていた。この文明圏の支配の源はコンスタンティノープルにあるローマ皇帝権にあり、これらいわゆる「ゲルマン諸族」の王国はある種のレプリカか傀儡であった。だからヨーロッパが独自の文明圏として誕生するためには独自の皇帝権が必要だったのである。そしてローマ帝国とは異なったキリスト教文明圏が必要だった。西での皇帝権誕生には800年のシャルルマーニュ戴冠が必要であったし、新しいキリスト教文明圏の誕生は1054年の東西教会分裂が象徴的事件となる。

III ヨーロッパの成立（ヨーロッパ時代の始まり～5世紀から11世紀）

7世紀のイスラームの拡大によって、地中海世界が北のキリスト教世界と南のイスラーム世界に分断された。これによって帝国西部の北側がヨーロッパを形成していく

契機が与えられた。このことを最初に提言したのが、ベルギーの歴史家アンリ・ピレンヌである。外部の刺激によって文明が生まれるという認識は世界史理解には不可欠のものである。では彼の議論の中心である「イスラームの侵攻で交易が途絶した」というのは実証したものなのであろうか。ピレンヌのこの説明には無理があり、その後ポーリンやロンバルなどの研究で書き換えられたのも当然と言えば当然である。彼らの議論は金銀複本位制のイスラーム、ローマを中核とし、銀本位制のヨーロッパをその周辺とする大規模の世界経済が成立したことを明らかにしたものである。言い換えると、ピレンヌがイスラームの侵攻によってヨーロッパは自然経済的な農村社会に変貌したと考えたのとは大きく違って、むしろ後進地帯として、資源供給地帯として構造化されたということになる。

800年にシャルルマーニュは聖像崇拜問題のこともあり、ローマに向かい、クリスマスを過ごした。そのミサの時に教皇レオ3世がローマ皇帝の冠を彼にかぶせる。これが一般に西ローマ帝国の復興といわれている事件である。もちろん彼の戴冠をローマ帝国が黙って見ている筈がない。彼が篡奪者だからである。戦争が始まり812年になってアーヘンの和約が成立。その結果、ローマ皇帝はコンスタンティノープルの皇帝が名乗り、シャルルマーニュには西の皇帝が認められた。つまり政治的最高権力者である皇帝が、それも独自の皇帝がローマ帝国から認められたということである。これがないと、ヨーロッパはローマ帝国から離れて独自の文明圏とはなれないのである。

ヨーロッパは帝国なき文明圏を形成していく。しかも王国と国家はローマ教皇によって認証される必要があった。つまり教会が国家より先に存在し、基本的枠組みを与えていった。帝国なき文明のもう1つの特徴は、その経済構造において、帝國的な強制経済原理よりは市場原理の方がより本質的であったということである。1054年の東西教会の分裂により、東のギリシア正教世界と西のラテン正教世界は2つの兄弟文明圏を形成していくことになる。これによってヨーロッパはひとつの文明圏をなしていくわけである。結論的に言えば、ヨーロッパの形成は5世紀から11世紀までの長い話なのである。ラテン的キリスト教世界の枠組みを与える組織として、教皇庁は巨大機関と化していくのである。

IV 「ヨーロッパ時代の終焉」と「ラテン的キリスト教文明」の地方化

ヨーロッパ文明の構造について、ここでは3つの重要な特徴を簡単に挙げておきたい。1つは市場経済的な展開。2つ目は独特な二政治的二元構造。教会が帝国の代わりとして行政組織化し、世俗内化すればするほど教会と国家間の対立激化が予想される。3つ目は合理化と世俗化である。12世紀にはスコラ哲学が発展していくが、

その本質は神の存在証明にあると思う。神の存在を証明することは無限や根本を問うことである。この姿勢が近代の思想と学問を生んでいくことになる。1453年コンスタンティノープルが陥落し、ローマ帝国が滅亡した。東方ギリシア正教は統一的枠組みを失う。しかしその後継を任じたのがモスクワ・ロシアであった。また17世紀になるとプロテスタントの活動が活発になり、彼らはまだ余地が残っていた北アメリカへと向かう。ハレツキーが「大西洋時代」と呼ぶ時代は、まさに大西洋がアフリカ海岸を除き、キリスト教世界の地中海と化した時代であった。1517年以降ルターの活動は救済の独占的機関としての教会に疑問を呈したのである。やがてラテン的キリスト教世界は、ローマ・カトリックとプロテスタント諸派に分裂していく。問題はヨーロッパに2つのキリスト教が成立したことである。それまではヨーロッパはキリスト教世界として表現されてきた。これからはどちらのキリスト教徒かが問題になってくる。しかし、長い時間の中で育んできた伝統的枠組みは厳として存在する。おそらくその時ヨーロッパという言葉が彼らを包む柔らかい帰属意識の「ベール」として脚光を浴びるようになったのである。

18世紀に起こった4つのことがキリスト教文明を次の段階に持っていくことになる。1つはロシアがヨーロッパの政治的共同体の構成員になったこと。2つ目はアメリカ大陸のヨーロッパ植民地の独立が始まったこと。3つ目は「古いヨーロッパ」内部で起きた。産業革命は19世紀の爆発的なヨーロッパ資本主義の拡大を生む。4つ目はフランス革命によって導かれた国民国家体制の誕生である。

20世紀の2つの戦争はヨーロッパ内部の戦争がもはやヨーロッパ内部では終結しないことを示すことになった。もはや世界の指導原理がヨーロッパではなく、アメリカとロシアが担っていくことを意味したのである。1917年から1919年はハレツキー的な意味で「大西洋時代」つまり「ヨーロッパ時代」の終焉を示しているのである。

おわりに

現在私たちは変動期にいることになる。グローバリゼーションが何を意味するのか、覚めた目と強い意志で観察する知性が教師に求められていると思う。私たちの生活は少しばかり複雑であるが、その複雑さを楽しみたいものである。

研究発表

「中国三星堆遺跡を見学して」

北海道興部高等学校教諭

千 田 周 二 氏

1. 三星堆遺跡について

この正月に中国四川省に行く機会があり、三星堆遺跡及び博物館に行ってきた。この遺跡は中国の遺跡の中でもかなり特殊な遺跡である。いわゆる我々が中国史での遺跡というものを考えるときにそれと全く違うものが出てきた遺跡ということで、非常に中国の考古学の中でも特殊な遺跡として扱われている。

まず、三星堆遺跡という名前を初めて聞いた方もいると思うが、三星堆は四川省にある。四川省は中国の内陸に位置し、辛い食べ物で有名なところで、面積は日本とほぼ同じ、人口も約1億人でこれも日本とほぼ同じ。成都と重慶が代表的な都市で、遺跡はその成都市の北の広漢市というところの南興鎮の三星村にある。四川省というのはかなり奥地で中国への旅行でもあまり行ったことがないかと思うので、実際に写真を見ていただきたい。

<▼以下、プロジェクターによって写真の説明>

「成都」「永陵」（五代十国の前蜀の王、王建の墓）「杜甫の草堂」「武侯祠」（『三国志』の劉備・諸葛亮などを祀っている）「閔羽像・劉備像・孔明像」「昭烈之陵」（劉備の墓）「四川料理小吃」

三星堆へは交通手段としてタクシーを利用したが、高速道路が冠水して渋滞になり、スケジュールがかなり狂ってしまった。本来であれば遺跡が発見された穴の方にも行こうと思っていたが時間がなく、博物館を見学した。三星堆博物館は非常に立派な建物で、チケットは50元。1～4階まであり、内容も展示も良かった。

1929年、三星堆の近くの月亮湾という場所で玉が出て、それを農民が掘って売っていたのを、1931年にその様子を見ていたイギリス人の宣教師がそれを収集し始めた。

1934年に考古学の調査隊が組まれて、月亮湾の科学的な発掘が行われた。新中国になってから今度は四川省博物館で月亮湾の玉器の調査をしたが、1950年に古代の蜀の中心的な場所だったのではないかという話が出てくるようになった。1970年代に中国で建築ブームが起きて、農民たちが土を取り遺跡がどんどん破壊されていき、本格的に遺跡を調べることになった。1980年に再び四川省博物館で三星堆を正式発掘したが、墓であるとか土器・石器などいろいろな物が出てきた。時代的には新石器時代の終わりから殷末周初(紀元前11世紀)くらいまでである。また、南北に点々と土の山のようなものがあり、1984年に北京大学の嚴文明氏が、どうやらこれは人工のものであり、古代の城壁だったのではないかという推測をする。調べると版築法でつくられた城壁だったということがわかった。さらに1986年に農民が掘って玉が出てきた。また調査に入ると今度は青銅器や中国ではあまりない金製品が出土した。それが一箇所の穴から捨てられていたかのように出てきた。また青銅器がさらに大量に出土し、これもやはり捨てられたようなかっこうで、壊されて焼かれているという形であつ

た。これは古代の人が神を祀るときにこのような青銅器をつくって埋めたのではないか、ということで、「祭祀坑」と呼んだ。(最初の祭祀坑を一号坑、2番目を二号坑と呼ぶ)

では、この三星堆からはどのようなものが出てきたかという、博物館の中は撮影禁止なので、図録から抜き出した写真を見ていただきたい。

<▼以下、プロジェクターによって写真の説明>

●「青銅立人像」

人が立って手を輪にしている。高さは2m 61でかなり高い。中国の青銅器というのは何かを入れる、例えば酒や肉など入れる青銅器が多い。具体的に人の形をした青銅器というのは、中国では今まで出てきた殷や周の青銅器にはない。ところが三星堆で出てきた青銅器というのは明らかに人の形をしたものなど、具体的な形で出てきている。しかも形や顔が非常に奇抜。造形的にも今までの中国にこのようなものが出てきたことはなく、非常に注目された。

●「青銅跪座人像」

14cmくらいのもので、人間なのかそうではないのか判断つきかねる顔をしている。

●「青銅失冠人頭像」「青銅弁索冠人頭像」

見てもらうとわかるが、みな口が広く、目がアーモンド形でつりあがったような目をしている。明らかに中国の青銅器ではこのようなものは今まで出てきていない。

●「青銅平頂人頭像」「青銅円頂人頭像」

これは頭の形が少し違うが、頭の形の違いはおそらく何らかの階級なり身分なりを表していたのではないかと推測する学者もいる。

●「金面罩銅質平頂人頭像」

非常に面白いのは青銅器に金を貼ってある。これも中国で今まで発掘された青銅器にはない。中国はどちらかというと玉を重視するので、金を重視している点は面白い。

●「青銅人面具」

これはマスクのようなもので、後ろがない。

■「青銅獸面具」

一番特徴的だったのは目が蟹のように飛び出ているもので大きい。高さ65cm、幅が138cm。これの解釈については後で見ていきたいと思う。どう見ても人間の顔には見えなくて、特徴は大きな耳と突き出た目、額にあいた穴。穴には飾りのようなものがある、それがはずれたのでは、と言われている。

●「青銅太陽形器」

これは太陽を表しているのではないかと言われている。蜀というのは太陽があまり出ない地域で、太陽に対する信仰は随分強かったのではないかと。

●「青銅神樹」

これも青銅としては中国で最大のもの。高さ約4m。おそらく太陽が昇り降りする扶桑という木をモデルにしているのではと言われている。このような非常に大きな青銅器が出ている。しかも何かを入れるものではなく、明らかに何かを象ったものがたくさん出ている。

●「青銅鳥面像」「青銅公鷄像」

これは明らかに鳥。河鵜と鷄。こういう鳥もたくさん出ている。なぜ鳥なのかというのも議論のターゲットで、こういう鳥をどうやらシンボルにしていたのではないかとされている。

●「三牛獸面紋尊」

全く中国的なものが出ていないかという、実はこの尊という酒等を入れるものだが、殷の遺跡などからよく出る。だから全く殷の文明とも関係がなかったというわけでもなさそう、ということがわかっている。

●「金杖」

金を多く使うというのが特徴の1つで、長さ1 m 4 3で絵が描いてある。魚、鳥、魚を矢のようなもので刺している絵である。

●「魚形櫛」「虎形櫛」

魚等を象った金の飾り。

だいたい今まで見てきたものはほぼ殷の末、つまり紀元前11世紀から12世紀のものだとされている。

それではこれらの奇妙な青銅器が何を表しているのかというのを見ていきたい。この遺跡が日本で大きく知られるようになったのは、1992年にNHKスペシャルで「謎の仮面王国」というタイトルで放映されてからである。この後も三星堆遺跡についての研究は進んでいる。

三星堆遺跡の時代区分だが、時代区分というのは土器で行なわれている。だいたい3～4期に分かれていて、第1期は紀元前28世紀～前21世紀頃、第2期が紀元前21世紀～前16世紀頃、この第1期と第2期の間は土器の形を見ても明らかに違う。どうもここで別の文化が起こったようだとされている。第3期は中国の黄河流域でいうと殷の時代と重なる紀元前16世紀から、殷から周にかわって周の中頃、紀元前9世紀くらいまで、としている。ただし紀元前11世紀頃、ちょうど殷と周が交代するあたりから紀元前9世紀頃を第4期として見ている場合もあるようである。

2. 三星堆文明について

ここで三星堆の特徴をもう一度おさらいしてみると、遺跡の方には出てきていないが、いろいろと掘ると、ここは明らかに稲作をやっていた文明である、黄河流域のひえや粟などの畑作文明に対して、三星堆は稲作を中心にしたところだということがわかる。長江流域はだいたい稲作中心で、稲作文明が発展していたようである。下・中流域も上流にあたる四川も稲作のもとにあったと言われている。それから青銅器に関しては、非常に形が大きいもの、そして奇抜な造形、器ではないもの、非中国的というか、非黄河文明的な特徴を備えたものが多い。金製品もやはり非中国的、今まで我々が思ってきたような中国的なものの要素からかなりはずれている。その一方で玉も多く見られる。これは今までの中国のものと共通する。それから版築による城壁。これは逆に中国の一般の城壁と同じものと見られている。

次に三星堆文明を見るときに、どのような問題点があるのかをいくつかに分けて見ていきたいと思う。

まず、青銅器。目が飛び出ているとか、金が貼られていたり、金の杖が出てきたり、非常に高い樹が出てきたり……。これらはいったい何を表しているのかという解釈をめぐっては研究者の中でも若干意見の相違がある。

それから、それらの青銅器が明らかに廃棄された形で2箇所の穴に焼かれて、壊されて、捨てられているというのは、いったいなぜかということである。

またこの三星堆と殷や周などの黄河流域の国家とどのような関係があったのかということについてである。他にもいろいろな問題点はあるが、例えば担い手は誰かなど、このよ

うな点について今現在どのような研究がなされているかを紹介していきたい。

3. 出土品の解釈

まず、一番問題になったのは、目の飛び出ている仮面である。非常に巨大で、目が飛び出て口が横にまで裂けて、耳が大きい。このような仮面がいったい何に使われたのか。この仮面をめぐっては二通りの解釈がある。

1つは資料に示した徐朝龍氏の説で、だいたいこの説が多いのだが、蚕叢もしくは燭龍というものを表しているのではないかという説。蚕叢というのは、四川省蜀の歴史を著した『華陽国志』という本がある。(この『華陽国志』は書いていることが荒唐無稽なことがあるということで、今まで史料としてはあまり注目されてなかった)『華陽国志』自体は晋の時代に書かれたものであるが、卷三に「有蜀侯蚕叢、其目縦、始称王」(蜀侯に蚕叢という者がいて、その蚕叢の目は縦でその蚕叢が初めて王を称した)という記述がある。この記述をめぐって今までは目が縦というのは何だろう、ということだった。チベットの第三の目のようなものだろうか、と、いろいろな解釈があったのだが、どうせ神話なのだからと考えられていた。ところがこの仮面を見て、「縦目」というのはこの飛び出た目のことを表しているのではないかと徐氏は考え、つまりこの飛び出た目の仮面は蜀の初代王・蚕叢を表したのではないかと考えたのである。NHKの番組が扱ったのはここまでだが、さらに徐氏はいろいろ読み解き、荒唐無稽な話が書いてある『山海経』の中に、顔は人間だが体は蛇、という龍が出てくるが、この仮面はこの龍なのではないか、なぜならその「燭龍」という龍は、「直目」(目が直)と書いてある。これは蚕叢を表して、なおかつ蚕叢が龍と化して崇められた燭龍を表しているのではない

かと考えるようになった。これがかなりポピュラーな説である。また、この蚕叢という人物には「蚕」という字がついていて、蜀は昔から養蚕がずいぶん盛んだったようで、その養蚕の神様としても崇められていて、どうやら養蚕の神様である蚕叢を表したものだ、ということを行っている。

ところが、これに真っ向から異議を唱えた人がいる。中国の研究者は大方この「蚕叢説」で統一されているようだが、日本の古賀登氏は、今年の5月か6月に出した『四川と長江文明』という著書の中で、徐氏の説にことごとく反対している。そして古賀氏は蜀にあるいろいろな伝説や少数民族の伝説からみて、目が縦というのはあまり誉めた言葉ではない、ということを行っている。『漢書』などでも「縦目人が来るぞ」と皆が恐れたという話を引きながら、どうも「縦目の蚕叢」という言い方で蚕叢はあまり好かれた者ではないし、そのような者を神様として崇めるわけではない。縦目というのは目が縦についていることであって、これは目が飛び出ている凸目なのだ、と述べている。凸目ではなく縦目とあるのだから、これは蚕叢ではない。では何かということになると、三星堆の南隣に天回山というのがあって、ここは「陶唐の丘」と呼ばれていた。仮面と一緒に4m近い樹が出てきているが、これは太陽がそこから昇ったり降りたりする扶桑の木ではないかと言っており、これは徐氏と一致しているのだが、そうするとこれはおそらく太陽神である五帝の堯であろう。堯は陶唐氏なのである。従って「陶唐の丘」と呼ばれていることから、これは堯を表しているのではと述べている。「凸目であって縦目でない」というのも一理あるが、ではなぜこれが帝の堯なのかというところは、本を読んでも若干説得力に欠けるのではというのが私の個人的な意見である。では、蚕叢は祀っていないのかということ、蚕叢は祀っていて、

金を貼った人面像ではないか。なぜならば蚕叢の時代に「金頭蚕」といって金で作ったもので、それで蚕を祀ったというのがあり、どうやら蚕叢は金と関係している、だからこの人面像が蚕叢だ、という言い方を古賀氏はしている。

この突き出た目の仮面の他にも、人面の仮面の他に鳥がたくさん出てきている。鳥の頭や鳥を象った取っ手のようなものである。ではこの鳥は何なのだろうかということで、やはり『華陽国志』をたどってみると「蚕叢の次の王は栢灌と曰い、次の王は魚鳧と曰う」とあり、魚鳧というのは鵜のことである。四川省のこのあたりは非常に鵜飼が盛んである。おそらく鵜飼が盛んであるということは鵜をシンボルとしたようなものが作られていたのではないかと、ということでこの青銅器は魚鳧を象徴するようなものとして作られたのではないかと言われている。これは徐氏も古賀氏もほぼ意見が一致している。それ以外に解釈はあまり考えられない。

そのような青銅器の特徴的なものの他に、三星堆の特徴は金が多く出るということである。特に金杖に関して、これは砂金が結構取れるのでどうやらそれで金に対するパワーを認めていたのではないかとこののだが、金杖は何を表していたのか。金杖は先程も見てもらったが、鳥・魚・ニコツと笑った顔の絵がついているものがある。この杖というのは世界のどの文明も権力を表すものとしてある。おそらくこれも政治的権力と宗教的権威とが合わさったようなものだ。なぜならそこには魚があり、鳥があり、そのようなものを信奉している人のパワーの源としてこの杖があるのだろう、というのが徐氏の考えである。また現地の学者の陳徳安氏も、おそらくこれは蜀の王の魚鳧の杖かもしれないと述べている。

ところが、またこれに真っ先に異を唱えた

のが古賀氏で、図案を見ると王様の顔が結構コミカルだ。この図案は王様が神聖であるとかそのようなものを表しているようには見えない、と言う。おそらくこれは何らかの願望を込めて作ったものであって、王様の権力を象徴しているような杖ではないのではないかと。また、中国の他の所で杖というものが権力を表すものとしてあったということはない、と言っている。これは魚鳧王が持っていたものではなくて、何かの祭りの時にシャーマンが大漁祈願で使った水神が降りてくるためのものだったのではないかと。これについても解釈がさまざまにあるが、私が引っかかっているのは、王が権力の表象として杖を持つ慣例が中国にないと古賀氏が述べていることで、これをそもそも今までの中国の文明で捉えること自体がまずいと思っている。明らかに他の事例から見ても今までの中国の文明で捉えることはできないので、今までの中国になくてもここにはあるのだ、と言ってしまえばそれまでなので、この記述に関しては説得力があまりないと思う。しかしこの杖に関しての解釈もその図案をめぐって若干議論があるようである。

次に大きな樹を象ったものだが、これはさまざまな中国の神話に書いてあって、『山海経』や漢の時代に書かれた『淮南子』などの文献をつきあわせるところ、やはり扶桑だろうということで徐氏も古賀氏もほぼ一致した見解をしている。

4. 三星堆遺跡と古代蜀王朝

このように出土品の解釈をめぐってもさまざまな意見があるが、出土品と例えば前述の『華陽国志』などに書かれている蜀の歴史はどのように解釈したらよいのか。古代の蜀について述べたものは『華陽国志』の他に『蜀王本紀』というものがあり、これは漢の時代

に楊雄という人が書いた史料であるが、ただこれは史料として単編で残っていない。何らかのものに引用されて残っているものなので、引用がかなりまちまちで、その引用の中でもいろいろあるようで、例えば徐氏の引用と古賀氏の引用が違っていたりして、なかなか厄介である。その中である程度校正したものが（レジュメの）資料に載せたものである。「蜀王を称する者に蚕叢・栢灌・魚鳧・蒲卑・開明という者がいた。蜀の王、先の名は蚕叢、後代は栢灌と曰い、後の者魚鳧と曰う。この三代は各数百歳、皆神化して死なず」死なずに神様になったという言い方をしている。「その民亦た頗る王に従いて化して去る」住んでいた人も王と一緒にいなくなってしまった、仙人になってしまった。「魚鳧は湔山に田し仙を得たり」魚鳧も湔山というところに狩りをして仙人になってしまった。みんな仙人になってしまっている、つまり死んではいない。「後に一男子有り、名は杜宇と曰う（中略）乃ち自立して蜀王となり、号して望帝と曰う」杜宇は蜀王になりその後帝を称して望帝となった、ということが書いてある。そして邛というところに都を置いてその後、鼈霊という人物が出てきて、ある時洪水が起きてその洪水を望帝が治水できず、鼈霊がその洪水を上手く治めたということも書いてある。同じような記述は『華陽国志』にもあり、「周の時代に乱れて蜀が先ず王を称す」とある。この「周の時代に乱れた」というあたりの文章はあまり当てにできない。というのは、何でもここにこじつけるということが他の文章にもあり、昔からこの部分は当てにならないだろうと言われている。「蜀侯に蚕叢がいた。その目は縦だ。次は栢灌である」この栢灌というのが実は何も記述がない。蚕叢と魚鳧の話は史料によく出てくるが、この栢灌はほとんど何も出てこない。あまりインパクトがなかったのか、特徴的な話がなかったのかはわからない。魚

鳧が仙人になったという話は『華陽国志』にも出てくる。「その後王が有り、杜宇と曰う。民を教え農に務めしむ」どうやら杜宇は農業を教え、盛んにさせたとなっている。やはりここにも書いてあるが、邛邑というところに都を移した、あるいは瞿上というところで国を治めた、とある。このあたりは『蜀王本紀』と同じだが、望帝と名乗って名前を蒲卑に変えた。その後、前の記述と同じように水害があつて、その水害を除くことができず、開明に譲った。開明というのは鼈霊に禅譲、つまり位を譲ったとある。そして望帝は西山に登って隠居した、とある。

これらの記述と三星堆は何か関係があるのか、どのように整合性をつけるかというのと、徐氏は、蚕叢と魚鳧はかなり連続性があるだろう、なぜならば表記が「次王」と書かれている。それから「此三代」蚕叢・栢灌・魚鳧とまとめて書かれている。そして魚鳧の次に杜宇という人物が出てくるが、ここは蚕叢から魚鳧につながるような連続性がない。なぜならば記述に「後に」という表記がある、少しここは間があいているか、何らかのかたちで断絶しているということを表しているのではないか、と言っている。また、邛への遷都をし、名前を「蒲卑」と変え、農業に力を入れた、とあるが、徐氏はこのあたりの文章をいろいろ解釈し、この邛への遷都ということはどういうことなのか、それから名前が蒲卑、蒲卑というのは水鳥のことだが、このあたりに着目している。さらに前に出てきた祭祀坑、つまり青銅器やさまざまな祀りの物が穴に深く埋められていることは、そこでどうやら王朝が交代したのではないのか、その痕跡ではないのかと徐氏は考える。なぜならば、祭祀坑では遺跡が壊され、そして焼かれている。先程の太陽の青銅器もバラバラに壊されていたものを直したものである。しかも祭祀坑は

一号坑も二号坑も同時期のもの。どうやら三星堆が放棄された時期、これは城壁でわかるらしいのだが、この時期と同じくらいであろうと見られている。さらに金杖であるが、徐氏はこれを王権の象徴だと考えている。王権の象徴だとする杖を果たして何かの祀りだといって埋めるだろうか、それに祀りのために埋めるには穴が窮屈で粗末だ。どうやらあわてて掘ったようだ、と。そして穴は2つあるが、この2つの中身はある程度区別して作られている。

そこで徐氏はこのようなストーリーを作り出した。前に三星堆の時代区分を見たが、第1期（紀元前28～前21世紀）は蚕叢王の時代。蚕叢王が具体的にいたかどうかはわからないが、蚕を何かトーテムのようなものとした人たちがいた王朝で、おそらくこの時代に養蚕が始まったのであろう。第2期が栢灌の王朝だったのではないか。このあたりはかなり推測である。第3期、だいたい殷の時代の初めくらいからだが、ここが魚鳧の王朝の時代なのだろう。魚鳧という王がいたというよりも、魚や鳥をトーテムとしたような王朝があったのだろう。その魚鳧が蚕叢などをお祀りしていた、前の王朝の神などを祀っていたのではないか、ということである。そしてどうやらこの魚鳧の時代に青銅器が作られている。青銅器は長いスパンで作られたのではなく、殷末くらいに一度にたくさん作られている。徐氏は、魚鳧王朝が実は殷周革命、周が殷を倒すその時にどうやら周に協力したのではないか、周に協力して殷を滅ぼした後に、殷の青銅器技術者を蜀に連れてきてその人たちに今まで自分たちが何かで作って祀っていたものを、青銅器で作らせたのではないか。ところが西周の中期、だいたい紀元前8世紀～9世紀くらいになって、杜宇王が出てきて、どうやらこの杜宇王が魚鳧王朝を倒したので

はないか。その時に先程の祭祀坑を掘って前の王朝の青銅器や祀ったものを壊して埋めたのではないか。だいたいこれが祭祀坑の年代と、紀元前9世紀くらいで合っているらしい。西周の後期に杜宇王朝があって、春秋の前期に洪水があった。どうやらこれは本当にあったらしい。その洪水の治水が上手くいかなかった杜宇王朝が滅んで、鼈霊がその治水をして開明王朝ができた。前316年に秦が開明王朝を滅ぼした。これが蜀の古代の歴史ではないかと考えている。

これに対し古賀氏は、そうではないと唱えている。古賀氏は蚕叢・栢灌・魚鳧について、蜀では昔から養蚕が盛んであった。蜀錦といって昔から蜀の絹は有名で、それが西南シルクロードを通してビルマの方に行ったという話があるが、その養蚕、それから栢樹信仰もどうやらあって、その王として栢灌というのがつくられた。また、鵜飼も盛んであった。だから「～王」という王朝があったわけではなく、それはただそこにいた人たちが信仰しているものを王としてここで出しただけの話であって、具体的にそれに対応するような何らかの王朝があったわけではない、と古賀氏は述べている。だから蜀で最初に王として実在したのはおそらく杜宇だと言っている。ここから古賀氏の説の面白いところなのだが、この杜宇は堯のかなり下った子孫であろうと言う。堯がいたかどうかという問題もあるが、そういうことを称していただろう。だからこそ杜宇は先程の目が飛び出た仮面を祀っていたのだろう。古賀氏のこの説だと、この仮面は堯の顔を表していることになる。

徐氏は、三星堆は魚鳧王朝の首都だったろうと言っている。魚鳧王朝の首都は瞿上という所で、その三星堆をつぶして杜宇王朝は邛に移ったのだと言っているが、古賀氏はいろいろ地方史なども探して、杜宇が都を移した

邽というのは、これが現在の広漢市だと位置づけている。広漢市こそは三星堆がある場所なのだ、つまり、杜宇のつくった王朝こそが三星堆の担い手なのだ、と唱えている。

それでは祭祀坑が壊されているのはどういうことを表しているのか、これをまず解釈しなくてはならないということで、徐氏は前述のように青銅器はことごとく破壊されていると言っているが、見る人が見ればこうも変わるか、という典型だと思うのだが、古賀氏は、宝器は破壊されても穴の掘り方は比較的丁寧だ。埋納も種別に順序良くされている。適当に埋めたのではない。だからこれは誰か他の外からやってきた人たちが、これは前の王朝で祀った物だから、と言って壊して捨てたのではなく、使っていた人たちが何らかの事情で使えなくなり、仕方なく壊して何かの儀式に従って埋めたものではないか、と言っている。これはどのようなことを表すことになるのかといろいろ考えていて、前に見たように、杜宇王朝はその後鼈霊の開明王朝に譲るとい話になっているのだが、しかしその譲る時に洪水があったと書いてある。洪水の時に穴を掘って祭器を埋めている暇はないだろうから、おそらく洪水の時に鼈霊に譲ったというのは作り話だろうと古賀氏は言っている。そして古賀氏はいろいろと中国の文献をあたって、杜伯国という国があるのを見つける。これは現在の西安の近くにあったそうである。この杜伯国というのは従来、三星堆から移ってきた、蜀が周の国によって移されたその人たちがつくった国だと言われていたのだが、そうではなく、この杜宇の国が周の前期に何らかの事情で西安の近くに移ったものだ、だから同じ「杜」の文字がついているのだ、とこのあたりの論証をもっと細かくやっている。どうやら周にとって蜀の国、杜宇の王朝の蜀の国がちょっと危ない存在になったから、徳

川家康の「国替」のように、むりやり移してしまえということになった。其の「国替」をさせられる時に周の監視のもと、やむなく青銅器などを解体・埋納させられたのではないだろうか、と言っている。結論として、古賀氏の考えは徐氏とはかなりズレる。つまり前16世紀頃にもう杜宇の国はできていて、三星堆の城壁がだいたいこの時期に作られているのだが、これと同じくらいだろう。前11世紀頃、ちょうど殷と周の交代の時期、周王朝の最初の頃に今言ったような事情で三星堆を放棄し、王朝が陝西省の西安の方に移されたのだろう。その時に祀りの道具を埋めさせられた、それが祭祀坑なのだという解釈をとるわけである。ここで気づかれる方もいると思うが、徐氏は祭祀坑がつくられた年代が前9世紀頃だと言っているのに対し、古賀氏は前11世紀頃だと言っている。この二人の違いはなぜかというのは、調べがつかないが、最初はだいたい前11世紀頃に掘られたのではないかと言われていたのは間違いない。徐氏の著作を読むと、その後いろいろ調べると西周の時代の前期、もしくは中期でなければ出てこないようなものが埋納されていた、ということで、徐氏は祭祀坑の年代を下げた。そのようなことがあって二人の年代に違いが出てきている。ここを合わせないと二人の意見のどちらが正しくてどちらが間違っているかということは言えないので、私も判断がつきかねる。両方とも面白い説であるが、大方は徐氏の説が主流であろう。

5. 今後の課題

この後、三星堆についてどのような展開があるのかということで、この三星堆文明は誰が担い手だったのか、これは徐氏も古賀氏も共通している。五胡十六国の五胡に氐というのがあるが、氐はもともと羌と同じグループ、

チベット系の民族だと言われていて、羌は割と山の中腹に住んでいて、氐は山の低いところに行った民族だと言われている。どうやらそれが担い手なのでは、と言われているが、これもはっきりとはしていない。このあたりは神話やさまざまな伝説などいろいろな文化人類学的アプローチが今後必要となるであろうし、そのような手法も今現在少しずつ使いつ出しているようである。

次に課題としてここが一番大事だと思うのだが、遺跡や出土品の年代特定である。前述のように徐氏と古賀氏が同じ物に対し違う年代をあてていること自体が、議論がかみ合わなくなるので、果たして祭祀坑がいつつくられたのかなど、そのあたりの土俵が同じにならない限り平行線をたどったままである。

史料の再構成と解釈については、例えば『蜀王本紀』だが、これは今ないので他の文献に引用されている『蜀王本紀』などを引っぱってきている。ところがそこにさまざまな違いが出る。この違いによって読み方が結構変わってしまう可能性がある。それぞれまちまちに引いているので、その部分のテキスト・ポリテックのようなものが必要になってくるだろうと思う。それから史料の読み方自体もかなり不統一であり、特に漢文の場合はよくあるが、どこで文章を区切るか、どこで句点をつけ読点をつけるかなど、徐氏も古賀氏も都合の良いように読み、句読点のつけ方がかなり違っているところがある。そうすると文面が大きく変わってしまうので、そこをもう少し詰めていかないとかなり恣意的な解釈になってしまうのではないかとと思われる。

それから『山海経』というなかなか面白い史料がある。これは非常に荒唐無稽なことが書かれていて、例えばお腹に穴のあいた人がいて、その人たちは動く時に前と後ろに木の棒を渡して、そこに人を通して担いでいく

の話が載っていて、大漢和辞典を引くと挿絵がたくさん載っていて楽しいのだが、徐氏が行なっている作業というのは、今まで『山海経』＝荒唐無稽だと言われていたが、どうやら三星堆の史料を見ると『山海経』の世界を表しているのではないかと、つまり『山海経』というのは三星堆文明のことを書いているのではないかとされていて、扶桑や西王母伝説というものもここから読み取れるのではないかとということなのである。『山海経』自体の史料がどの程度の信憑性をもつのか、という問題もあるのでその解釈は可能かということはある。

それから、他の長江文明、実は長江文明というのは中流域・下流域とたくさんあるが、共通する特徴は米作と養蚕である。この共通する長江文明の中に三星堆はどのような形で位置づけられるのか、他の長江文明とのつながりはあったのか、このあたりの関連も今後必要になるかと思う。

最後に、我々がもしこれを教材として使う時に、今までの中国史の殷・周などの中でこのような全く別系統の文化をどのようなかたちで位置づけたら良いのか。全く独立してあったというわけでもないし、何らかのかたちで殷・周とのつながりもあったようなので、こうした点も今後の三星堆を見ていく上での課題になっていくのではないかと思う。

【質疑応答】

Q1

私も中国史を大学時代に学び、中国に大変興味があり、今日のこの発表も大変興味深く聞かせてもらった。私も高校で中国史の授業を展開する時に常に念頭に置いていることは、なぜ中国は1つか、ということである。生徒

に地理的に説明する時にヨーロッパがすっぽり入る空間がある中で、中国として、1つの国として説明することに若干違和感を覚えながら授業展開している。

私は、中国は1つではないと考えていて、中国は1つにまとまっていく力を常に持ち続けている、その根源はいったい何にあるのかというのはよくわからないが、1つではなかったものが最終的に政治的な力によって1つにまとめられていくと考えるのだが、今回の三星堆の出土によって黄河流域の古代文明とは異質な文明、異質かどうかはまだこれから研究が進められると思うが、違う遺跡が発掘されたことによって、私は複数の中国があってもよいのではないかと考えるが、今回実物を見て、それについてどう思われるか。

(函館ラ・サール 小川)

A 1

複数の中国という話だが、徐氏の『長江文明の発見』という大変良い本があって、長江文明に関していろいろ書いてある。これを読むと今、小川先生が言ったとおりに全然違う物がたくさんあったと言うことがわかると思う。個人的にはなぜ中国が1つなのかということについて、「秦の始皇帝」がいたから、というより他にないと思う。もともと中国はあの時点で7つに分かれていたのだから、ちょうど今のヨーロッパのような状況だったものが、始皇帝によって1つになって、それからまた分裂傾向にあったものがまた漢によって1つにされて、そのあたりから1つというものが正常の状態となっていくのかなと。だからその前は決して中国の人たちが1つになろうとか、1つだろうなどということはないのではないか。中国というのはどこまで中国なのかというと、今の中華人民共和国のエリアで中国というとチベットも新疆も全て中国になってしまうので、何を以て中華文明とか中国

文明とするのか疑問である。三星堆の文明も考えようによっては蜀の文明が秦に滅ぼされ、最終的には開明王朝で、そう考えると複数の中国というのは三星堆だけではなくて、あちらこちらにあったと言って構わないのではないか。そう考えるとようやくヨーロッパはEUで通貨統合だとかいろいろ行なっているが、2000年以上前に始皇帝がありとあらゆることを統一したということはすごいことだなと思う。

Q 2

写真をいろいろ見て興味をもった点があったので質問させていただきたい。太陽があまり出ない、曇りが多い街だということで、他の街も訪れたそうだが、私が聞いた話ではブラームスというドイツの作曲家がいるが、彼はドイツの北のハンブルクという街の人で、ハンブルクもすごく曇りがちで、あの気候が彼の陰鬱な、暗い曲風を作ったということなのだが、その他の街と四川の街との天候が与えているかもしれない違いなど何か感じたことがあれば教えていただきたい。

(沼田 菊池)

A 2

滞在期間が短かったためあまり体感というわけにはいかなかったが、実際に我々が行った時にも洪水があって、常に水と闘ってきたのではないだろうかという実感は何となくあった。やはり太陽がない分だけ太陽を求め続けていたのかなというような気がして、そこに太陽の昇ってくる樹を立てたり、そのようなものを祀ったのではないかと、思うが、もう少し長く滞在すればまた別の面も見られるかも知れない。前に述べたように洪水で王朝が変わったなど、あまり現地の人と話をしているないのでわからないが、人々の太陽を求めるものは強いのではないかと思う。

Q 3

私も数年前に徐朝龍氏の長江文明の本を読み、黄河文明とは違った古代文明ということで非常に感銘をうけたのだが、いわゆる長江文明というと下流の河姆渡遺跡と、上流の四川三星堆ということだと思うが、三星堆遺跡を見学する動機というか、それはどのようなことからなのかをお聞きしたい。自然に行きたいと思ったのか、あるいは三星堆の遺跡を実際に目で見たい、博物館で現物を目にしたということだったのか、三星堆に行っただけなのはお聞きしたい。

(OB = 元札幌豊明養護学校長 久富)

A 3

私も先生と同じで、徐氏の本やNHKの番組を見て非常に面白くて、今まで考えていた中国とはまた別のものがあるということで、いろいろ本を買って読み、四川に行くのであればぜひ三星堆ははずせないと思った。実際にどのような物が、どのくらい出たのか、またどのようなところなのかということナマで体感してみたいということで訪れた。下流や、また最近では湖南省など中流にもすごく古い稲作の跡が出てきている。今まで我々はどうしても中国文明というと畑作・ひえ・粟というイメージに捉われ過ぎていたが、そうではないものが、特に玉を中心として河姆渡や良渚があったり、また稲作があったり、そして稲作に必ずつきものなのが養蚕であったり、そのあたりを中心とした文明がある。今まではどうしても一元的な黄河流域の文明でのみ見ていたので、稲作文明の雰囲気味わってみたいというのが理由である。

Q 4

黄河文明では出土する金属器などに文字が多い時期とあまりない時期があるが、今回見学されたところの遺物、つまり玉器や金属器

に文字が刻まれたものがあるのかどうか、時期によって違いがあるのかどうか、また、その文字は黄河文明とは当然違うと思うが、そのあたりをお聞かせいただきたい。

(札幌西陵 中川)

A 4

文字については私が見た限りでは、祭祀坑から出てきたものに文字らしきものが刻まれているようなものはなかったと思う。ただ、20年くらい前にニュースになったと思うが、巴蜀文字というのが出てきて、明らかに漢字とは違う何かの記号で、これは文字として使われたであろうというものが四川から出てきている。どうやらそれが使われたのではないかという推測はされているのだが、それがまとまって、例えば周の時代に金文が青銅器の上に彫りこまれたというようなことはないようである。だから三星堆でどのような文字が使われていたかということははっきりしないが、1つの説として巴蜀文字という文字が何らかのかたちで使われていたかもしれないということはある。

▼第35回大会予定

日 時	平成16年8月6日(金)
	※前日に日本史の研究会があります
会 場	札幌市教育文化会館
講 師	未 定
研究発表	未 定(募集中)

@世界史研究会のホームページ@

→  北海道高等学校世界史研究会

<http://www2.snowman.ne.jp/~ennui/kouseiken/>

■編集後記■

会報第10号の発行となりました。会員の皆様のご協力に感謝申し上げます。
また34回研究会の記録を担当していただいた先生方には、お忙しい中、記録原稿の作成をしていただき、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、いつものように編集作業が遅れ、関係の先生方にいろいろとご迷惑をおかけしましたことをお詫び致します。

(札幌西陵・中川雅史／札幌南陵・吉田 徹)